

---

# 門下生と虚刀流と時渡りと

柴健

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

門下生と虚刀流と時渡りと

### 【NNコード】

N3819N

### 【作者名】

柴健

### 【あらすじ】

これは刀語1-2巻のあの物語り。 七花が 突然改竄される前の未来の日本にタイムスリップ。過去に帰るための手がかりを見つけると同時に一人の少年と出会い。 そう、これがすべての始まりと知らずに。

時代劇ならぬ、現代活劇！刀語SSのはじまり、はじまり。 作者の妄想炸裂ですが、それでもいい方はどうぞ。

## 序章、いわゆるプロローグ

西暦 20XX年

日本 京都

「いじはど」なんだ？」

青年は一人つぶやいた。

見てくれば、筋肉質の長身、ぼさぼさの長髪、文物の和服、だが十  
二単をさらりと重ねたような派手なものだった。

青年の名は鑑 七花。

知る人は知っている、刀語の主人公である。

「否定姫はどこに行つしまったんだ。探すのが面倒だ……。」

のんきなことをつぶやきながら青年は、

「待つていれば、あっちが来てくれるかもしれないから、久しごり  
に修行でもするか……。」

この青年、どこまでものんきである。

話は変わり……。

「いじが京都かー（嬉）」

こちらは一人の少年である。

こちらの見てくれは、中肉な体に、真面目そつな顔つきに、背中にリュックである。

「刀語の1巻の舞台になつてゐるから、七花がいたりして・・・、な  
いか（悲）」

この少年、いわゆるオタクである。

少年は寺の奥に進んでいく、これがすべての出会いと知らずに・・・

## 序章、こねぐるプロローグ（後書き）

初めての作品ですが、読んでいただけたら光栄です

## 第一話 時すでに始まりを刻む

「お寺つて神秘的だなー。」

そんなことをつぶやきながら少年は奥に進んでいった。

すると、だれもいないはずのところから声が聞こえる。

「・・・ん、誰か、いる?」

声がするほうに少年は進んでいった。

茂みに隠れながら少年は気付いた。

寺の前でだれかが修行をしている・・・。

ふと少年はその人物を見ながらある人物の名を思い出す。

「鏻・・・七花じゃないのかなあ?」

少年はのんきにつぶやきだす・・・。

この世にいるはずのない人物の名を・・・。

しかし、主人公にそう思わせたのは目の前にいる人物が叫んでいる台詞からだつた。

「虚刀流、七花八裂！」

そう言つて、七花は空氣に技を放ち続ける。七連続の華麗な技だつた。

「かつ・・・かつこいい！－」 ガサツ

「・・・誰だ、あんた。」

「あつ。」

ばれてしまった！と少年はあわてた。

一方の青年は、冷静に構えをとつてゐる。

右手を上こ、左手を下こ、どちらも平手の形で、足は、右足を後ろ、左足を前に置き、相手に壁を作るような構え。

それはまるで、格闘ゲームの構えのよつなものだった。

「虚刀流、一の構え - - - 」「鈴蘭つーー。」

少年は、青年、鑓七花の台詞をきれいに奪い取つた、悪氣は無く。

「あんた、なんで虚刀流の構えの名前をーー?」

七花は少し、あわて氣味に聞いてみる。

「そんなの刀語の基本中の基本じゃないですかー!」

カタナ・・・ガタリ?なにそれ?

それはですね・・・と七花の疑問すべてに少年は答えた。

余談だが、七花が理解するまでたいへん時間がかかったのは、いうまでもない。

「やうか……」の改竄される前の日本の未来では、とがめと俺の一年間が小説になっていたのか。」

「す」「…七花さんのくせに、物分かりがいいですね!」

「…・・・あんた、す」「失礼だ。」

七花は呆れるよひに答える。

「ともかく、」<sup>1</sup>が違ひ世界といひとは分かつた。」

「うふ、うふ。」

「でも、どうやつて帰るべきなんだうつ・・・?」

何も手がかりはないのだ。七花は考える。

そこで少年は、

「なんかそれっぽいのないんですか?」と尋ねる。

そう言われ、七花は和服の中を探つてみた。

ひらり、と三つ折りの手紙が落ちる。

「・・・こんなものを入れた覚えがない。」

拾つた手紙にはこう書かれていた。

己が過去に旅をした地に再び足を踏み入れよ、さすれば道は開かれる。しかし、条件がある。

・行く先々のどこかにある刀を見つけ出し、すべて破壊せよ。

・己が認めた門下生一人を連れていいくこと。

それが貴様に課せられた、試練だ。

「・・・・わけがわからん。」

「七花さん、なんて書いてあるん - - - ビュン- ビュン- ビュン-」

「危ない！」

とつさに、七花は少年を小脇に抱え飛来してきた物体を避ける！

飛んできた物は・・・クナイだった！

「誰だ！出できやがれっ！」

七花は気配のある茂みに叫んだ。

その後、七花は少年に離れるよつて叫んだ。

ザツ、と突然八つの影が七花を円を作るよつて囲んだ。

影の正体は、八人の忍だった！

しかし、ただの忍では無い。

なぜなら、忍の服装が七花が倒したことのある、真庭忍軍のものにそっくりだつたからである。

「この時代には真庭忍軍がいるのか?」

「そんな」とは無いはずです。コスプレならありそうですが。」

コスプレ?と七花は聞きたいところだが、生憎そんな暇は無い。

忍達の空気が殺氣にあふれているからである。

七人までなら楽に倒せたが、八人なため七花も考えなければならぬ  
いのだ。

この少年・・・一般人を巻き込みたくはないが・・・。

七花は忍の見た目に注目をし、観察をする。

忍の武器は、全員が日本刀である。

これなら、いける。

七花がそう踏んだ瞬間、忍達は一斉に襲つてきた。

しかし、一斉といつ単語は誤りである。

その内の一人は、少年に向かつていったのである。

助けたいが、こんなんじや絶対に間に合わない！

七花が諦めた次の瞬間、七花の予想は大きくはずれる。

少年は構えをとつていた。

そう、それはさつき自分が構えた虚刀流一の構え・鈴蘭と同じ構え  
だった。

「ガキがいつちょ前に構えなんかとつてるんじやねえよ……」

一人の忍が怒声と共に少年に斬りかかる。

しかし、少年はそれをかわし、叫びと共に技を放つ！

一の構え・鈴蘭からはなつ、虚刀流の奥義のなかで最速の掌底！

「虚刀流、鏡花水月！！」

少年の技は、忍の鳩尾にはまつた！

「ばつ、馬鹿なツ！俺がこんなガキに・・・。」

「負けた台詞がお約束過ぎだよ（笑）」

忍は倒れた。そして、よそ見をしていた七花の周りの忍が叫ぶ。

「オラアツ！よそ見してんじゃねえよ！..」

七人が一斉に襲つてくるが、七花には動搖の欠片もない。むしろ、

余裕だつた。

「七人なら、俺にとつては丁度の人数だからな。あんたらには負け  
る気がしねえよ。」

七花も構えをとり、最終奥義を放つ！－

虚刀流には、七つ奥義があり、少年が放つた掌底・鏡花水月、貫手  
による突き・花鳥風月、

飛び膝蹴り・百花繚乱、拳による突き・柳緑花紅、両手によるはつ  
けい・飛花落葉、

両貫手で相手を斬る・錦上添花、前方三回転かかと落とし・落花狼  
藉の七つがある。

そのすべてを当てる技こそ、

「虚刀流最終奥義、七花八裂！」

七花は奥義の一つ一つを一人ずつに放つた！

忍達は、じとじと倒れていく。ビリヤリ、下つ端だったようだ。

変体刀すべてをあつめた七花にとって、忍び達は余裕だった。

それより問題は、少年の使つた技だった。

完璧とはいがまでも、虚刀流のそれだった。

「あんた、虚刀流を使えるのか？」

そう聞かれ、少年は答える。

「それっぽかったですか？ 実戦なんて初めてですけど（汗）」

「だから、どうして使えるんだ？」

七花は少年に再び尋ねる。

「それは刀語を読んで一人で修業したんですよ、虚刀流を・・・。」

少年は続ける、

「虚刀流に、七花さんに憧れて修業をしたんですよ、3年前から・。  
・。」

「そうだったのか・・・。」

知らなかつた。

自分に、虚刀流にこんなに憧れを持つていてくれた人間を。

そして、七花はあることを思い出す。

『門下生を連れて旅をしなければならないことを

虚刀流は一族直伝の流派なのだけれど、

それでも、七花は決めた。

「とこりであんた、俺の弟子にならないか?」

「いいんですか！？」

七花はうなずく。

自分以外に、虚刀流が好きな人物がいることを

嬉しく思いながら。

「それではよろしくおねがいします、七花さん。いえ、七花師匠！」

少年は嬉しそうに、願っていたことのように歓喜に震えながら言の葉を紡いだ。

「ところで、あんたの名前をあれはまだ聞いていないんだが。」

そうでしたね。と少年は笑いながら答える。

「改めまして、僕の名前は柴花 健と言います。」

少年は自分の名を告げた。

「それじゃ、よろしく頼むよ 健。」

「うして、恋人同士ではなく、師弟関係を築いて再び旅をする」と  
になつた七花。

このよつとして旅の始まりは告げる。

「・・・・・・。」

茂みの中で見ていた人影の存在を知らず・・・

第一話 完

## 第一話 時すでに始まりを刻む（後書き）

読みお疲れ様でした。

第一話、満足のいく作品でしたか？

ちなみに、少年の名前はペンネームからとりました（笑）  
一話田も頑張るので、よろしくおねがいします。

## 人物紹介？

鏢  
やすり  
七  
しちか  
花

年齢：24歳

所属：虚刀流七代目当主

称号：虚刀流、日本最強（過去の世界において）、完了形変体刀  
虚刀・鏢

人柄：ぼさぼさの髪に、筋肉質の肉体、派手な女ものの和服、体中の傷。  
刀語の主人公。性格は第一巻に比べると、とても人間らしい性格になった。

口癖は過去の相棒とがめにつけられた、

「ただし、その頃にはあんたはハツ裂きになつていてるだろうけどな。」である。

言われて傷がつく言葉は「花が無い」。

基本面倒くさがりだが、戦いでは相手を観察して戦うタイプである。

趣味：元々は「無趣味」であったが、「地図作り」になつた。

柴花  
しばはな  
健  
けん

年齢：17歳

所属：虚刀流門下生

称号：なし（増えていく予定）

人柄：短めのボブカット、中肉中背、真面目そうで温厚な顔つき。

性格は明るくて優しく、どんな人にも優しくできるお人好し。  
第一話で七花に弟子入りをする。

マンガやアニメが大好きなオタクである。

刀語もその一つで、虚刀流を修行してたおかげで弟子入りを  
果たせた。

修行経験は中学三年のときからしているので3年間である。

趣味：「二次元鑑賞」、「虚刀流の修行」。

## 第一話 修業と因縁と鹿せんべいこと

旅をすることになった虚刀流七代目当主の鏑七花と、

虚刀流門下生となつた柴花健は、

前回の神社の庭で修業中である。

「あんたはたしかに筋はいい。しかし、虚刀流の基礎はまるで駄目だ。」

最初からのダメだしである。

「それはたしかにそうですね（汗）」

「ということで、おれが手本をやつてみるからあんたはそれを真似してみる。」

「わかりました、七花さん！」

「門下生、師匠と呼ぶ気はないらしい。」

七花はそんなことを思いながら、虚刀流一の構え・鈴蘭を構える。

「まあ見ててくれ。虚刀流、鏡花水月！」

七花は空に掌底を打ち込む。

「それじゃ、やつてみてくれ。」

「は、はいっ！..」

健も一の構えを構えて、

「虚刀流、鏡花水月！」

「・・・・。」

「どうですか？」

「いいんじゃないか。とりあえず合格だ。」

「あつがとつぱりこます。」

健は、天真爛漫な笑顔で答える。

「それじゃ、そろそろ行くか。」

「はい。」

七花達は神社を後にした。

京都・街中

「未来になつても京都は変わらないんだな・・・。」

「昔の名残を残した街ですからね、京都は。」

一人は街中で京都の団子を食べながら喋っていた。

しかし、七花に田をとめるものは誰もいないのでのんびりと喋る。

「ヒカル、これからビームに行きまわへ。」

健は七花に問う。

「まずは、不承島にいかないと始まらないからなあ・・・。」

「無いですよ、不承島。」

健は即答する。

それに対して七花は

「・・・・はー・?」

七花は驚嘆する。唯一の手掛けりがなくなってしまったことによ  
て。

現代には不承島はないのだ。

「これから一体どうあるんだよ……。」

「そんなこと言われても（悪）……、まあ色々行ってみましょ  
う。」

健は七花の不安をふつ飛ばすべくこの明るなで答える。

「……せうだな、歩いてみるか。」

健の気持ちを察したかのよつ、七花も気を取り直してとつあえず答える。

団子屋を後にし、七花達は手掛かり探しに出かける。

もひるん、勘定は健である。

七花は「仕事あるべきかな」と、このとおり思つた。

そして一人は京都の町を歩き始める。

有名な神社はもちろん、さまざまな場所を歩いた。

健は鹿に鹿せんべいを『えたところ、鹿に噛まれた。』ところの状況にある。

「・・・馬鹿なのか、あんた。」

一方の七花はそんな光景を見ながらも、のんきに返事をする。

七花は服に入れておいた本を取り出して、地図を書き込んでいる。

刀集めが終わつた後に七花がとがめと約束したことである。

「京都は」こんな感じで・・・って、うおおー?」

座つて地図を描いている七花の周りには、こいつの間にか鹿だらけだつた。

よく地面を見ると、鹿せんべいの欠片が落ちてこむ。

「あつはははははつ（笑）」

健の笑い声が聞こえる。

おややしく、健の仕業だろ？。

「助けてくれなかつた仕返しですー！」

「・・・面倒だ。」

内心では「楽しい」とか思いながらもやつ答へる。

とがめにも見せてやりたかった。

心の中で七花はやつ思つた。

とがめのことを懐かしく思いながら。

そんなこんなで一人とも観光気分で楽しんでいいのである・・・。

## 第三話 絶刀・鉋 改 上

京都

宿屋で泊つたりしながら京都を観光。

京都の観光も普通にしている二人・・・。

しかし、大事なことにきずいた。

「手がかり見つけてねーじゃん!-?」

七花はツッコミをいれた。

「そーですねー・・・って、そうでした!」

のんきに返答と思いきや、しつかり返す健。

もはや、漫才の領域。

「つまごり」と叫つな、作者。「

「誰に言つてゐるんですか?」

といふな感じで物語は進んでいく。

「お寺とか、有名な大仏とかの場所にも行つたのですね（泣）。」

歩きながら健が答える。

あると、京都の街中にメイドカフェらしきものがあった。

「・・・・・？」

なにこれ？ 七花の感想。

「・・・・・・・・・・（汗）」

いやな予感しかしない・・・。

なぜなら看板には、

「メイドのウモリ?」と書かれていたからだ。

「めいどの・・・じつもつ?」

七花は看板の字をそのまま読んだ。

そして七花は思い出す。

一円に戦つた冥土の蝙蝠のことを。

七花は納得した。

納得しないほうがいいのだけれど。

「なにかありますね・・・入つてみますか。」

健は不安げに七花に尋ねてみた。

「・・・そうだな。」

何も知らず、七花は適当に答える。

やむなく、二人はメイドカフェに足を踏み入れた・・・

「こりつしゃいませつ、『主人様！きやは？』

可愛らしい和服のメイドがお決まりの挨拶をする中、

「・・・・・・」

二人とも沈黙である。

「・・・健はこりつの慣れてそうだけだな。」

「・・・初めて来ましたよ。」

二人が会話を交えている中、一人の人物が店の奥から出てきた。

「なんだあ？ お客様、ウチのメイドがお気に召しませんでしたかあ？ きやはきやはつ！」

「 」 「 」 「 」

出てきた男は・・・変態だった。

なにしろ、男のくせにメイド服を着ているのだから。

変態以外のなにものでもないつ！

といひが、七花の反応は、

「あんた、真庭蝙蝠じやないか・・・？」

「・・・・・えつ・・・？」

あまりの事実に驚きを隠せない健。

「 そうだぜ。俺はこのメイドカフェ店長、真庭蝙蝠さまだ。ご主人、驚いたか？」

「 そんなことより、あんたのその格好に驚きだ。」

「 えつ、セーフーー？」

「 一人は普通に冷静である・・・らしい。」

「 ところで蝙蝠、あんた絶刀・鉋を持ってないか？」

七花は蝙蝠に質問した。

「 ああ、あるぜあるぜ。俺の腹の中に。」

蝙蝠は淡々と答える。

「 だったらその絶刀、譲ってくれないか？」

「まあ、わつ急ぐもんじやねーよ。」

蝙蝠は笑顔で答える。

「嫌な予感しかしない・・・」

「俺の名前は冥土の蝙蝠だぜ。冥土の土産はあまりも大盤振る舞いする接待好きの性格なんだぜ。」

「だから、メイドなんてやつてゐんですね・・・」

一巻の台詞だなあとか思いながら答える。

「どうすればいいんだよ。」

「俺にとつてはこーんな刀、別にいらねーからな。持つてきただければ持つて行つていい。」

「・・・?」

「ただし、ただ渡すんじゃおもしろくねえからな・・・この店で遊

んでいけ！！」

「………………」

二人の沈黙にも容赦なく、

「さすが冥土の蝙蝠だろ？」

「……蝙蝠がそう言つなり。」

七花は呆れ氣味に答える。

「そうですね……。」

こつして、二人は蝙蝠の接待を受けることになった……。

「ご主人様、なにがよろしいですか？」

二人はテーブルのイスに座つてメニューを見ていた。

「ちょうどお皿だったので蝙蝠が、

「だつたら最初は飯からだな、『ご主人。』

と言つたからである。

「何食べます?」

「俺はおいしいならなんでもいい。」

珍しく七花は普通に答える。

「だつたら、オムライスなんてどうですか?『ご主人様。』

「おむ・・・らいす?」

七花は不思議そうに答える。

「七花さんはオムライス知らないんですね。」

「だから、ねむらこすみつて一体・・・」

「まあ食べてみましょうよ。メイドさん、このケチャップ字付きオムライス二つください。」

「かしこまりましたっー。」

メイドはそう言つて店の奥に行つてしまつた。

「オムライスって何なんだ?」

「あのお姉さんが食べてる黄色のやつですよ。」

そういうつて七花は隣の席で食べている人を見た。

七花から見てみれば、黄色くて丸いものに赤いご飯が入つていてしか思えなかつた。

(「飯がなぜ赤いんだ・・・」

七花は謎の恐怖を覚えた。

「・・・面白い。」

健はそんな七花を見ながら言った。

「えつ・・・」

「『主人様、オムライス一つです。』

そんな会話をしていたらオムライスが来た。

「文字は何が良いですか?」

「文字なんて書けるのか?」

「ハイツ。このケチャップで。」

「すこしあくまで酸っぱいんですけど、」メイドは懐からケチャップをとりだした。

「なんだ・・・その赤いの？」

「調味料ですか。」

七花にはさっぱり分からなかつた。

「僕は、”刀語”でお願ひします。」

「かしこまつました。」

「すこしあくまで酸っぱいんですけど、」僕のオムライスにケチャップで字を書いてくれた。

「・・・つまいのか、それ。」

「すこしあくまで酸っぱいんですけど、」

七花は答える。

「それじゃ・・・俺も書いてもらおうかな。」

「何がよろしいですか?」

七花には特に思い入れのある言葉は無い。

しかし、七花はこう言つた。

「”とがめ”で頼む。」

「かしこまつました。」

メイドに書いてもらひながら七花はこう思つた。

とがめとも、ひつして未来の食べ物を食べたかった

今は「とがめのことを寂しく思いながら、

悲しく思いながら・・・

「七花ちゃん、食べましょ。」

健は気を察したのか、静かに言った。

「・・・つまみー。」

七花にはおこしかったようです。

「よかったです。」

こんな風に食事を楽しんだ後、いろんな事でも遊んで遊びました。

## 第四話 絶刀・鉋 改 下(前書き)

今回は少し核心に迫る話になります。

## 第四話 絶刀・鉋 改 下

「 まあ、蝙蝠、もうこいだろ。おとなしく絶刀・鉋を渡してくれよ。」

夕暮れの中、

メイド喫茶の近くの空き地で、

メイド喫茶店長、真庭蝙蝠

虚刀流七代目当主、鑓七花と

虚刀流門下生、柴花健は向き合っていた。

「 まあ、 そう焦るなつて、主人よ。 今出すから。」

やつぱり、蝙蝠は口に手を突っ込み刀を取り出した。

無論、絶刀・鉋である。

「あんなの初めて見ました・・・」

「一度田の俺でもびっくりだ。」

一人はそんな風に感想を言ひ合つ。

もちろん、絶刀・鉋は唾液と胃液とその他もろもろ付いていた。

「それじゃ、それから始めよつかへ。あやはあやは。」

蝙蝠は無邪氣に言つ。

「その前に聞きたい」とと言ひたいことがあります。

健はそつと言つ。

「なんだ?言ひたい」とは一つがいいんだけどな。」

「始めて、食事と娛樂ありがとうございました。」

「・・・ありがとな。」

一人でそう言った。

「それはいいんだよ。俺はメイドの蝙蝠・・・もとて冥土の蝙蝠なんだからな。」

蝙蝠は気楽そうに答える。

「んで、聞きたいことは何だ?」

「はい、あなたは七花さんを昔から知っていましたか。」

「いや、初対面だけどよ・・・それがどうしたんだ?」

「・・・!?」、「やつぱり。」

三人相応の反応をする。

「どうこういとだよ、健。」

七花は尋ねる。

「最初から引つかかっていたんです。なぜ、死んだはずの真庭蝙蝠  
がここにいるのかと。」

「ああ、そういうことか。まあ俺は真庭の子孫にあたる人間だから  
な。」

蝙蝠は答える。

「でも、まにわには四季崎記紀に滅ばされたんじや・・・」

「いや、別の先祖に生き残りがいてな、その別の真庭忍軍から俺は  
この名前を受け継いだんだ。」

真庭子々みたいなやつか・・・

七花は思つた。

「でも、真庭忍軍はこの世界には実在しないはずですー。」

健は尋ねる。

「俺が知るかよ、知つたこつちやねえよ。じゃあ、そのあんたの隣にいる架空の人物は誰なんだよ。」

「それは・・・」

「まあ、ともかくとつと始めよつせ。話してばっかで退屈になつちまつたぜ。」

「それもさうだな。俺も面倒になつてきた。」

頭が悪いからな。と七花が言つて

「それじゃどつちが相手になるんだ?無論一人同時でも負ける気はしないがよ。きやはきやは。」

「それじゃ、俺がやる。丁度退屈してたからな。」

そう言つて七花が前に立つ。

「いや、僕に戦わせてください。僕の実力も知りておきたいでしょ  
う。」

「あいにく、言つておくが俺は刀語を読んだことがあるから動きは  
分かつてこむ。あやはあやは…」

「…・…・…」

そう、ここは現代である。

相手が七花の虚刀流を知つていても過言ではない！

「わかった、まかせる。」

わかりました…と告げて健は前に出る。

「虚刀流門下生の柴花健、推して参る…・…・一度言つてみたかつ  
たんだ～（嬉）」

「んじや、真庭忍軍所属兼メイド喫茶店長の真庭蝙蝠。いかせても  
いかせぬ。あやはあやは…」

今、火蓋が切って下された。

健はとりあえず、一の構え・鈴蘭を構える。

「そんじゃ行かせてもらつぜ、報復絶刀！！」

蝙蝠は前に向かって突きを出してくる。

「虚刀流・菊！」

そういうと健は刀を体で捉える。

「破壊が目的だから、遠慮なく行かせてもらいますー。」

健は背骨を支点に刀を折りに行く。

「これこそが鉋を折る為だけに編み出された虚刀流・菊！」

「・・・っ！」

しかし、刀は折れ無かつた。

「そりゃ折れねーだろ。あんたはそっちのじ主より経験なぞそうだしな。」

経験の差か・・・たしか般若丸もそんなこと言つてたな。と健は思つた。

蝙蝠から距離を置いて・・・一気に近づいて行く！

「虚刀流・薔薇！」

体重を前に置いての前蹴りを放つ。

だが、その攻撃は予想だにしない方法で防がれた。

蝙蝠は刀を盾のように構えていた。

「俺様は気付いたんだよ、この刀を防ぐのに使うことをなーーー！」

「・・・くつ！」

健の攻撃は防がれる。

そして、蝙蝠は空に飛び刀を振りかざす！

「オラ、オラ、もつと頑張ってくれよ門下生！報復絶刀！」

くつ、一か八かだ！！

健は蝙蝠のいる真上に向けて掌底を放つ！

「オリジナルの虚刀流・土筆！」

技は蝙蝠の刀を持っていた手元に当たり、刀が離れる。

「な・・・なにい！？」

落ちてきた蝙蝠に休まず技を放つ。

「いくぞつー虚刀流・飛花落葉ー」

虚刀流で唯一加減ができる両平手による掌底の奥義ー

蝙蝠はその場に倒れた。

「やつたな、健。」

「・・・ありがとうございます。」

健は倒れている蝙蝠を見ながら言った。

すると、蝙蝠は空氣となつて消えていく・・・

「油断した俺も悪いが、『主人よその甘い考えは捨てろ・・・』

「いやですよ。人はあまり殺めたくない。この力は殺す為でなく、

守るために得たんですから。』

「それが甘いっていうんだぜ……『主人……おやはず』

蝙蝠は空氣となつて消えていった。

小説のよつて死体ではなく。

「とつあえず、まずは一本だな。』

「それじゃ、どうぞ壊してください。』

そつとつて、七花は絶刀を破壊した。

絶刀を破壊した後、七花と健は宿屋にいた。

「僕つて甘いんですかね……ハハハ。』

健は七花に尋ねる。

「・・・いいと思つぜ。」

「えつ？」

「自分で貫ける覚悟なら、どんなことでも俺は良いと思つしな。」

七花は知つてゐる。

人を守る事は、人にも刀にもできないところを・・・

それでも、覚悟を持つことが大切だと・・・

それがどうめと過(ひ)した一年間を通じて分かったことだから。

「ふつ・・・ありがと、やれこまく。」

健はうれしそうに七花に言つ。

「次はどこに行くんですか？」

「次は因幡だ。現代では、えーと……」

「鳥取県ですよ。一巻に当たるから下鄙城ですよね。」

「迷わないか心配になってきた……面倒だ。」

大丈夫なのかな。健は思った。

そして、二人は次の国に旅立つ支度をする。

そして、この世界で異変が起きてこむ」と云がつく。

（絶刀・鉋 破壊終了）

番外編 第0話 桜花爛漫 柴花健の旅立ち（前書き）

今回は、健が京都に来る前はどんな感じだったかと言つ話です。  
彼が何を思い、どんな人物といつしょだったのかを少しだけ物語る  
話です。

一応ですが、あまり関係ないんで飛ばしちゃつても大丈夫ですよ（  
笑）

番外編 第0話 桜花爛漫 柴花健の旅立ち

僕の名前は柴花健。しばはなけん

家族構成は祖母のみ。

両親は交通事故で他界しちゃいました。

好きなことは、アニメ鑑賞と虚刀流の修行（羽田流）。

おかげでクラスでは「オタク」の称号をつけられる羽田に・・・。

そんなこんなで虚刀流を修行しようと思ったのは、ちょうど3年前の出来事だった・・・。

三年前・・・日本の平和などこかの街中

「面白い小説ないかな。」

「 いつものように本屋で、学校で朝読む小説を買いに来た。」

「 ・・・見つかるといいな。」

「 ここのは僕の理解者、上条 海星。」

「 おきますか、某アニメではないので、

「 幻想を破壊したり、イマ ンブレイカーを宿したりはしていない、  
僕の同類兼親友です。」

「 おきるのな名字だけだけど。」

「 いいのちつても、僕に呪つなんて・・・あるかね?」

「 おまえは変わったのが好きな変人だからな。」

「 あいかわらず、夜空のように毒舌だ・・・。」

「 そんなこんなで僕たちは本屋を歩いてみると、

一冊の本に田がとまる。

「カタナ・・・ガタリ?」

「・・・おまえ、刀語を知らないのか。」

「少なくとも、初めて見たよ。」

「何気に面白ニヤ。」

上條さんせきつた。当麻ではないよ。

「持つてるのは?」

「せうだが、お前に貸せよ(キツツ

キツツ)あるなつ、キツツヒ。

「借りる気は無こよ。買って読んでみたいし。」

「・・・・チツ。」

「私の恨みの「もつた」本だけはやめろ（笑）。」

「ひつて本を買った後、上条と別れた。

「トトマー」とこの言葉は聞こえてこない・・・残念だ。

家の前まで来ると、隣の幼なじみがいた。

勘違いしないでほしいが、彼女ではないので決してリア充などではない。

「健、どうこつてたの？」

幼なじみの少女、風音 美咲。

よくできた女の子だとこいつと話すもいひ、色々残念ですけど。

「いや、そろそろ朝読の時間に読む本が・・・」

「エッチな本とか？いやーん。」

「なつ！？そんなもん買わないよ！朝読むための本だよ。」

# 「官能小説？」

「だーかーらー！！」

そもそも恥ずかしいのでやめにしたい・・・。

「ふふつ、冗談だよ、冗談。それじゃまたね～。」

なんだつたんだ。

・・・・・ とっても不幸です。

「ただいま。」

といつても、今の時間帯は、まあやん仕事なんだよな。

少し暇なので、買ってきた刀語一巻を読んでみよっと思ひつ。

読んでみるとこれが面白かった。

七花の必殺技の名前とかカツコいい・・・

西尾さんマジ神!とか思つてしたり。

そんなこんなで僕は、刀語全巻をそろえて、白刃流ながら修行をした。そして・・・

今に至る三年間、虚刀流を修行してきた。

そして本日、地震により学校が倒壊。

すげー古い学校なのですが壊れた。

とうあえず僕は無事だった。

壊れたのはなぜか学校だけで、町にはなんの被害も無かつた。

これを機に、旅に出ることにした。

前々から、決めていたことだ。

学校が修理されるまで、旅することにした。

なんせ、修理にかかる時間が半年もあるのだ。

(だいじょぶか、この学校・・・)

七花ととがめが旅をした十一の都道府県を。

昔から旅して見たかった。

出かける前にこいつがつながらった電話・・・

海星

「まあ、行つて來い。お前はドジでアホで・・・(以下略)」

「これ以上聞くと、鬱になつてします(悲)。」

貯め込んだ貯金を財布に、僕は旅に出た。

少年はまだ知らない

この旅で運命の出会いをし、

そして、さまざまな体験する」と・・・

「まあは、つまこもんでもたべようかな・・・。おまちここナビ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3819z/>

---

門下生と虚刀流と時渡りと

2012年1月10日22時45分発行